西尾のあらまし

「西尾」の地名が最初に現れるのは、『今川義元書状』（1555年）に書かれている「西尾之御事」「西尾城」という記述です。

西尾地区は、西の碧海台地の上に旧城下町が造られており、東は矢作古川の両側に沖積低地が広がっています。

鎌倉時代に足利義氏がこの地に西条城（西尾城）を築き、吉良荘の支配を始めたのが、西尾の発展の始まりだといわれています。江戸時代には、城下町が北東に向かって広がっていきました。城下には、西尾藩主の松平乗全の墓がある盛厳寺や家臣たちの墓の立つ寺があり、また、神社では、伊文神社や御剣八幡宮があり、古い伝承の残る寺社が多くあります。おもな西尾市指定の文化財には、御剣八幡宮の鰐口、伊文神社の義倉蔵、盛厳寺の仏涅槃図、康全寺の梵鐘・魚鼓・仏涅槃図、善福寺の南無仏太子像、信竜寺の梵鐘などがあります。また、西尾祇園祭のねり物として始まった天王町の獅子舞や肴町の大名行列は、現在まで続いており、これらは西尾市の無形民俗文化財に指定されています。

校区には、大型ショッピングセンターなどがあって商業の中心であり、「小京都・西尾」のキャッチフレーズとともに愛される西尾の町は、今も多くの人々が訪れます。

西尾にゆかりの人物

松平乗全画像
盛厳寺蔵

❖ 井伊直弼とともに行動した西尾藩主　松平乗全（1795年～1870年）

1858年、江戸幕府は日米修好通商条約を結び、その翌年、大老の井伊直弼は、開国反対派の吉田松蔭らを捕らえて裁判を行いました。この裁判のまとめ役となったといわれるのが、老中だった西尾藩主の松平乗全です。裁判の結果、松蔭ら51名が処罰され、これを「安政の大獄」といいます。しかし、直弼が江戸城の桜田門の外で暗殺される事件（桜田門外の変）が起こり、幕府は方針を変えて、大獄で処罰された者の罪を許し、反対に大獄の裁定を下した側の処罰を行います。そのため、乗全は、藩主を弟の乗秩にゆずり、老中の職を解かれて西尾に隠居させられることになりました。

乗全は、藩医から医術を学ぶなど好奇心旺盛な性格で、外国にも関心を抱いていたといわれています。弓・馬・剣術を得意とし、書画・詩歌などの文化面にも幅広い趣味をもっていました。乗全の墓は、馬場町の盛厳寺にあります。西尾に墓がある藩主は、乗全だけです。

『瑞雲集』に掲載されている晩年の高橋瑞

❖ 女医の道を拓いた人　高橋　瑞（1852年～1927年）

高橋瑞は、江戸時代の末期に鶴ヶ崎で西尾藩士の娘として生まれました。生活が苦しかった瑞は、東京へ出て産婆になる決意をします。瑞は、必死で勉強し、30歳の時、産婆の開業資格を取ることができました。

瑞は、さらに医師になることを目指しますが、当時、女子には医師開業試験を受ける資格すらありませんでした。そこで、瑞は、内務省へ出かけて行き、女子にも受験資格を与えてくれるように頼みます。その甲斐もあって、女子にも医師の受験資格が与えられたものの、今度は医学を学ぶところがありませんでした。瑞は、済生学舎（現在の日本医科大学）への入学を認めてくれるよう校長に頼み続けました。三日三晩にわたり校門のところに立って頼み続けた末に、校長もやっと入学を許可します。瑞は、男性の中にまじって医学を学び、学資に苦労しながら35歳の時に医師試験に合格しました。東京の日本橋で開業し、さらにドイツ留学もしましたが、病のために１年あまりで帰国します。60歳になった時、誤診することを心配し、自ら廃業を決め、和歌に親しみました。その作品は、和歌集『瑞雲集』にまとめられています。

西尾のおもな史跡と文化財

1 伊文神社（平安時代）

伊文神社社殿（伊文町）

文徳天皇の皇子の八条院宮が、渥美郡からこの地へ移るのにともなって移転し、古くは鶴城字伊文（宮町）にあったといわれています。

祭神は、スサノヲノミコト・オオナムチノミコト・文徳天皇で、古くは伊文山牛頭天王社の名称が使われていました。伊文神社から御剣八幡宮まで神輿を渡す「西尾祇園祭」では、大名行列や獅子舞が行われます。社司を務める新家氏は、御剣八幡宮の宮司も兼ねています。

2 伊文神社の義倉蔵（江戸時代）

義倉蔵（伊文町）
木造瓦葺　間口6.3m、奥行10.8m

伊文神社の境内の西側中央に建てられている蔵が義倉蔵です。幕末の1858年に完成しました。義倉は、凶作に備えて食料を備蓄しておくことを目的とした組織で、自然災害によって収穫量が大きく左右されたこの時代には、全国各地に作られました。

江戸時代半ばを過ぎると災害・凶作・飢餓が全国的におこりましたが、幕府や諸藩は、これに対処する力を失いつつありました。西尾の城下町にも食料難や物価高に苦しむ人々がしだいに増加しはじめました。この時に窮民救助に立ちあがったのが、城下町の町人たちでした。平井長兵衛をはじめ、鳥山伝兵衛、吉見善次郎らが、「西尾義倉会」と称し、寄付で集めた米を酒造家らに貸し付け、利息を取って義倉米を増やし、困窮した農民を救済しました。

明治時代になると、全国では、その役目を終えた義倉蔵は取り壊されました。そのため、伊文神社のものは、現存する珍しい例となっており、市指定の史跡となっています。

３ 今川氏発祥の地（戦国時代）

今川町付近にあった吉良荘内の今川の地は、足利義氏から足利（吉良）長氏に「装束料」（衣装代）として送られたものです。『今川記』によれば、長氏は、西条城を長男の満氏にゆずって今川に隠居し、さらに、この地を二男国氏にゆずりました。そして、国氏は、新たに今川氏を名乗りました。

今川氏発祥の地（今川町）
西尾中学校の南側に位置している。

今川町には、土井堀・東堀・桜堀の地名が残り、今川氏の館は、これらに囲まれた西尾中学校の敷地辺りにあったといわれています。特に運動場の辺りは、城神様といわれた神社の境内であったと伝えられています。

1604年、南北朝時代に九州探題として活躍した今川了俊の家臣の子孫が、今川氏ゆかりの地である土井堀に了俊の供養塔を建てたと伝えられています。その後、この石塔は、1745年４月に西尾藩主土井利長の家臣によって再建されました。

現在、この墓所は、今川氏発祥の地として「今川氏発跡地」の石碑が建てられています。

鰐口
右側に「西尾」の文字が読み取れる。

４ 御剣八幡宮の鰐口（戦国時代）

西尾城の本丸内にある御剣八幡宮には、「永禄7年」（1564）の銘がある鰐口があります。鰐口とは、神社の拝殿につるし、参拝者が綱を振って打ち鳴らすものです。この鰐口は、銅製で、直径が36.7cm、重さが10kgあります。表面には、文字が刻まれており、西尾城主の酒井政家（正親）が、岡崎の鋳物師藤原宗次に造らせ、寄進したことがわかっています。その銘文に「三川國吉良庄西尾御剣鰐口」とあります。「西尾」の名が見える古い文化財です。

神輿の渡御
左に見えるのが御旅所。

5 西尾祇園祭（江戸時代）

伊文神社の祭礼を祇園祭といい、西尾城下町から夏の疫病（はやり病）を払う祭りです。土井氏・三浦氏が城主の時代からは、伊文神社から城内の御剣八幡宮へ神輿を渡御する形になりました。この時代に町人が城内に立ち入ることを許されるのは特別なことだったはずです。

現在も続く天王町の獅子舞や肴町の大名行列はこの神輿の渡御に付き従うねり物でした。祭りや行列を華やかに盛り上げるため、表六ケ町とよばれる6つの町が、ねり物に財と粋を競いあいました。

表六ケ町　中町・天王町・肴町・本町・須田町・幸町（横町）

6 石川台嶺殉教の地（明治時代）

西尾小学校の南東、葵町の路地を入ると、大きな供養塔があることに気づきます。ここは、昔、西尾藩の牢獄があった場所です。

ここには、1871年に現在の鷲塚（碧南市）でおきた「大浜騒動」の中心人物で、処刑された石川台嶺の殉教記念碑が建っています。

明治時代になると廃仏毀釈運動が全国で広まりました。これは明治維新になって、神仏分離が急速に進み、全国でも寺や仏像などが壊されたという出来事です。

殉教記念碑のある場所（葵町）
この地で台嶺は処刑され、記念碑が建てられた。

大浜陣屋（碧南市）の領内では、寺院の廃止や合併を強引に進める動きがあり、それに対して、浄土真宗蓮泉寺（安城市）の台嶺らが、数百名の信徒を率いて役人と談判するも、ついに役人一人を殺害するという事件が起こりました。この事件は、大浜と西尾の藩兵によって鎮圧され、西尾藩によって台嶺は処刑されました。

「西尾市資料館」へ行こう！

西尾城姫丸跡に建つ資料館は、瓦葺き入母屋造りの建物で、西尾城の城郭にマッチさせて造られています。

縄文時代から江戸時代までの貴重な郷土資料を常設展示と企画展で紹介しており、小中学生の歴史学習や西尾の文化を知る郷土学習に利用できる施設になっています。

常設展示では、西尾城の復元模型や西尾藩の家臣の甲冑などで、西尾城と城下町の様子が紹介されています。企画展示では、西尾市の歴史や文化を知ることができる様々な展示がなされています。また、地下にある収蔵庫には、寺津の枯木宮貝塚から出土した埋葬人骨や埋葬犬骨をはじめ、西野町の八王子貝塚から出土した縄文土器、住崎遺跡から出土した銅鐸形土製品や高根古墳から出土した須恵器など貴重な遺物が保管されています。御剣八幡宮の鰐口といった文化財も大切に保存されています。

◉場　　所　西尾市錦城町229番地
◉電　　話　☎56－6191
◉開館時間　午前９時～午後５時
◉入 館 料　無料
◉休 館 日　月曜日（祝日は開館）
　　年末年始

西尾城二之丸御殿で使用されたと伝えられる杉戸

鶴城のあらまし

「鶴城」の地名は、西尾城の別名が、鶴城と呼ばれていたことに由来しています。鶴城地区は、矢作川の北側に位置する米津地区と南側の西野町、鶴城、八ツ面の地区に分けられます。

縄文時代の中期（4,000年前）には、碧海台地の八王子貝塚あたりに人々が住みました。古代には、八ツ面山のふもとに大陸から渡来人たちもやって来て、すぐれた文化を伝えたといわれています。八ツ面山の中腹にある久麻久神社は、市内で古い神社の一つで、700年ごろに造られたといわれます。

鎌倉時代には、足利氏の一族が吉良荘に住み、のちに吉良氏を名乗り、この地方を支配しました。その吉良氏の寺として建てられたのが実相寺で、南北朝時代の仏像や梵鐘など、県指定文化財が多く残されています。戦国時代になると、戸ヶ崎城・荒川城・志籠谷砦・米津城・南中根城など、城や砦が造られ、城主たちは争いを続けました。

明治時代になると、西野町で商品としての茶が栽培され始めました。今でもこの地区には多くの製茶工場があり、盛んに製品が作られています。

鶴城にゆかりの人物

❖ 西尾に製茶技術を導入した茶祖　足立順道（1840年～ 1887年）

西野町地区に京都の宇治から茶の種を持ち込み、宇治の製茶技術を伝えたのが、上町の紅樹院34代目住職の足立順道です。順道は、西野町と宇治の気候がよく似ていることから茶の栽培に適していると考え、寺の畑に種をまきました。当時の茶畑の広さは約40ａといわれ、宇治の技術員を雇い、自らも汗を流して改良、発展に努めました。

順道が持ち帰ったお茶の木（上町）
写真は、持ち帰った木の孫にあたる。2006年に西尾で開かれたお茶サミットの記念に紅樹院に植樹された。

産業としての茶栽培が西野町地区一帯に引き継がれ、日本でも有数の生産量を誇る抹茶の原料であるてん茶の産地として発展していきました。

❖ 戦国時代を生きぬいた荒川城（八ツ面城）城主　荒川甲斐守義広（生年不詳～ 1565年ころ）

16世紀半ば、八ツ面小学校あたりに荒川城がありました。岡崎平野から吉良荘に入る北の要所をおさえるため、この地に城が築かれました。その最後の城主が、吉良氏の一族であった荒川甲斐守義広です。現在でも城の名残として、八ツ面町内には、土井・蔵屋敷・市場などの地名が残っています。

義広は、吉良氏と松平元康（徳川家康）との合戦の中で討ち死にしたという説と、その後に流浪して病死したという説が伝えられています。また、義広の墓と伝えられる場所は、市内に３か所あります。

真成寺（八ツ面町）
荒川氏の菩提寺

法厳尼寺（寄近町）
最も有力な家臣であった中神氏とのつながりの深い寺

不退院（上道目記町）
多くの戦死者を出したといわれる道目記合戦地の近くにある寺

鶴城のおもな史跡と文化財

八王子貝塚出土土器
出土した土器は2010年に愛知県指定文化財になった。

1 八王子貝塚（縄文時代）

八王子貝塚は、矢作川の左岸、稲荷山茶園公園の北側に位置している縄文時代後期（3,500年前）を中心とする貝塚です。明治時代から発掘調査が行われ、多量の土器や獣骨が出土しています。貝塚の範囲は、東西95m、南北は最長が120mで、遺跡の表面は茶樹を中心に畑地として利用されています。しかし、部分的に貝殻を見ることができます。おもな貝は、はいがい・はまぐり・かき・あさりなどです。

1981年の調査では、縄文時代中期後半から後期までの土器・石器・骨角器が出土しました。厚い貝層をつくった後期半ばの土器が最も多く、この地方の時代のめやすとなる土器で「八王子式土器」と呼ばれています。縄文をわざわざ磨り消してしまう手法が多く見られ、関東地方の影響を強く受けています。

八王子貝塚碑（上町）
周りに白く見えるのが貝殻

2 久麻久神社（平安時代）

久麻久神社は、『延喜式』に見られる神社で、創建は700年ごろといわれます。国の重要文化財である現在の本殿は、1527年に再建されたもので、吉良氏やその一族である荒川氏が建立したと推定されています。本殿は、室町時代を代表する桧皮葺き屋根、入母屋造りの建造物で、優雅な屋根と軒周りの美しい彫刻が目を引きます。

また、ここには、県下最古の神像彫刻である「牛頭天王神像」やユーモラスな表情の「陶製こま犬」など、古代末から中世にかけての美術工芸品が残されています。吉良荘の中で、神聖な場所であったと思われ、雲母（きらら）を採掘した八ツ面山とともに、久麻久神社は、西尾一帯を治めていた吉良氏の歴史を語り継ぐ貴重な文化遺産といえます。

牛頭天王神像（八ツ面町）
平安時代から鎌倉時代に制作された。

陶製こま犬（八ツ面町）
室町時代中期に制作された。（推定）

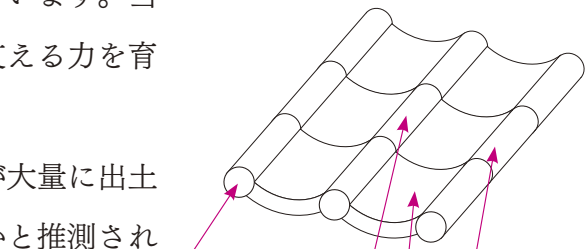
３ 志貴野廃寺（飛鳥時代）

大化の改新後、物部氏の氏寺といわれる北野廃寺（岡崎市）が創建されました。その後、矢作川流域には、たくさんの古代寺院が建てられましたが、それらの寺院は、いずれも現存していません。そこで、寺院があったと考えられる場所を廃寺跡と呼んでいます。当時の寺院は、仏教の普及以外に、律令制度を支える力を育成するための学校の役目も果たしていました。

志貴野町では、裏に布目のついた古代の瓦が大量に出土しているため、古代寺院があったのではないかと推測されるので、志貴野廃寺跡と呼ばれています。

また、小島町大郷山の西斜面や米津町などからも平瓦やのき丸瓦などの古代の瓦が出土しています。これらの場所は、斜面を利用して瓦を製造した窯跡であったと考えられています。

廃寺跡の地図



のき丸瓦
小島町大郷山出土

丸瓦と平瓦
志貴野町出土

４ 矢作川の開削（江戸時代）

1605年、徳川家康の命により、藤井村（安城市）から米津村まで新川が開削され、矢作川は新川と古川の二つの流れとなりました。開削したのは、長さ1,300m、幅36mで、堀り底が7.2m、深さ2.4mと記されています。その後、1618年に上町地内に、1644年には米津から鷲塚（碧南市）間に堤防が築かれ、矢作川は、ほぼ現在の形になりました。この事業により、西尾東部・南部地域が洪水の心配が減り、安定した水田耕作ができるようになりました。

また、矢作川は、輸送路として利用されました。河口にある平坂港は、川船による水運と海上輸送の中継地として発展しました。

矢作川分流点付近の航空写真

本願寺瓦製瓦場記念碑（志貴野町）
東本願寺の再建のため、本山の号令のもと、瓦を作ったことが示されている。

5 本願寺の製瓦場跡（明治時代）

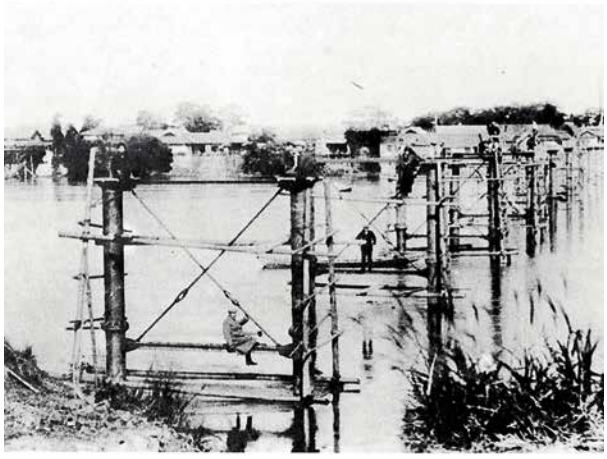
1879年、幕末の戦火で焼失した東本願寺（京都市）の再建にあたって、その御用瓦の製瓦場が志貴野町に置かれました。

阿弥陀堂（本尊を安置する場所）用に約11万2,000枚、御影堂（宗祖親鸞の木像を安置する場所）用に17万6,000枚、合計28万8,000枚もの瓦をここで作っていました。1881年から６年間で働いた人数は、のべ36万2,485人という記録が残っており、製瓦場は、窯数４基、建物24棟、１万5,248㎡の広さでした。費用は、全て信徒の寄付金でまかなわれており、信仰の強さを感じさせます。

この地に瓦の製造工場が造られた理由は、矢作川沿いにあり、原料の粘土が豊富で、作った瓦を船に積み、運ぶのに都合がよいことがあげられます。

6 米津橋（明治時代）

米津橋は、矢作川に架けられた東海道池鯉鮒宿（知立市）から西尾城下へ通じる街道の橋です。1876年、人や物資の流通を良くしようと米津村有志によって渡船に代えて橋が架けられました。洪水や老朽化などでたびたび架け替えられ、現代の橋は、９代目にあたります。



1917年建設中の6代目の橋
脚は鉄管、路面はコンクリート張りで造られ、三河地震の際に落下した。

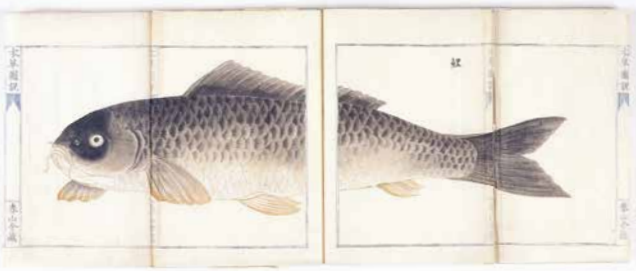
矢作川は、水運の大動脈であったため、米津橋の下を川船が、橋には人が、行き交いました。米津は、交通の要所であったことを物語っています。

「西尾市岩瀬文庫」へ行こう！

赤れんがで有名な岩瀬文庫は、西尾市の宝です。2003年４月に日本初の「古書」の博物館としてリニューアルし、2008年５月には創立100周年を迎えました。

常設展示として、書物の種類と用途や印刷の歴史など書物文化を知る展示を行っています。また、岩瀬文庫の歴史資料の展示、映像での岩瀬文庫の成立や蔵書を紹介しています。その他、パソコンでの検索・閲覧システムのシミュレーションコーナーなどもあります。

岩瀬文庫で一番人気のある本は、2005年の愛・地球博のポスターやカレンダーにも使われた『本草図説』です。これは、江戸時代末に高木春山という人がかいた博物図鑑です。草や木、花、動物、魚、虫、石や岩などの美しい写生図と、その説明をかいたもので、195冊あります。



◉場　　所　　西尾市亀沢町480番地

◉電　　話　　☎56－2459

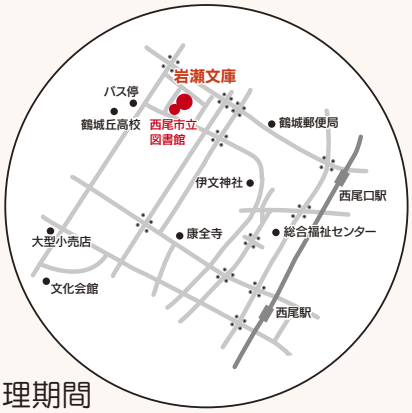
◉開館時間　　午前９時～午後５時

文庫資料の閲覧は午後４時まで

◉入 館 料　　無料

◉休 館 日　　月曜日（祝日は開館），第3木曜日

（7･8月は除く）年末年始　特別整理期間



HP：http://iwasebunko.jp/

平坂のあらまし

「平坂」の地名は、室町時代の1540年の『無量寿寺文書』にすでに表れています。平坂の「平」は、「でこぼこのない」の意味があります。台地から海へゆるやかに下るという意味から平坂と呼ばれるようになったのでしょう。また、矢田の地名は、平坂よりも古く、奈良時代以前から使われ、市内ではもっとも古いものです。

平坂地区は、北は中畑地区、南は矢田地区にいたり、大部分が碧海台地の上にのっています。その台地の東側に沖積低地、西側に新田が広がっています。江戸時代の初め、平坂港は、矢作川と三河湾を結ぶ接点として重要な役割をもち、幕府が定めた港でした。しかし、港は、矢作川の運ぶ土砂のため、年ごとに埋まっていきました。そのため、そこを干拓して現在のような新田が開かれました。今では港としての役割は失われつつあります。

伝統産業として、中畑のガラ紡、平坂の鋳物や煉瓦などがあります。

平坂にゆかりの人物

❖ 剣道の基礎を作った資産家　石川錦一郎（1876年～1928年）

石川錦一郎肖像
平坂小学校蔵

毎年、１月に平坂小学校で行われる「剱の式剣道大会」は、1904年に始まりました。平坂の資産家石川錦一郎が、平坂小学校に一対の日本刀（日本刀の長いものと短いものの１セット）を寄贈しました。これをきっかけにして、「剱の式剣道大会」が開催されるようになりました。この日本刀は、旧西尾藩主の子孫の松平乗承から1902年に錦一郎に譲られた由緒あるものでした。

錦一郎は、1876年、平坂町の石川鎌太郎の長男として生まれました。生家の石川小右衛門家は、江戸時代、西尾藩の御用達頭取であり、新田の米を扱う大地主でもありました。

錦一郎は、幼いころから剣道を習い、岡崎や名古屋の剣術家に師事し、その後は、自分の屋敷内にも道場を開いて、子どもたちの指導にあたり、平坂に剣道の基礎を作りました。また、無給で平坂尋常小学校の教師をしたこともありました。

1898年から1899年のころ、北海道の広大な原野（渡島半島二海郡八雲町）を手に入れ、開拓に取りかかりました。ここに山崎小学校や旧制中学校を造って、ここでも剣道の指導にあたりました。そして、この広大な開墾地に国鉄（現在のＪＲ）の駅を二つと水力発電所まで造りました。

❖ 平坂に鋳物を伝えた太田庄兵衛・九郎兵衛

平坂の鋳物は、17世紀半ばすぎ、近江国（滋賀県）辻村から太田庄兵衛・九郎兵衛が平坂に来て始めました。三河各地には、太田庄兵衛らの作品である梵鐘や半鐘が多く残されています。鋳物師は、鐘の他に鍋や釜などの日用品も製造しました。平坂で鋳物が発展した理由としては、平坂港があり鋳物の原料や製品の輸送に都合がよかったこと、三河三都（豊橋・岡崎・西尾）の一つといわれた西尾の城下に近く、鍋や釜の需要が高かったことが考えられています。

太田鋳造所（平坂町）
南、中、北工場の３棟に分かれ、北工場の脇には小運河があり、工場から直接荷物の積み降ろしができた。

平坂のおもな史跡と文化財

1 養寿寺（奈良時代）

鐘楼門（下矢田町）

奈良時代の創建と伝えられ、1461年に彰空宗永によって再興されたこの寺は、徳川家康の大叔母と伝えられる矢田姫の墓がある寺として有名です。雲版や地蔵菩薩像や楊柳観音菩薩像の絵像などをはじめとする貴重な文化財も多くあります。

３月の最終土曜日、日曜日に開かれる釈尊涅槃会は「矢田のおかげん」と親しまれ、境内は、たくさんの露店と多くの人々で賑わいます。「かげん」とは管弦楽のことで、仏前で笙や横笛、太鼓などの演奏に合わせて読経します。今から約310年前の飢饉の時、人々は音楽を奏でることで安泰や繁栄を祈ったことから始まったと伝えられています。

memo

解体修理時に見つかった1682年の墨書は、鐘楼門造立時の様子や当時の飢饉、朝鮮通信使の様子などが記されており、興味深い資料である。

2 桂岩寺（室町時代）

桂岩寺本堂（上矢田町）

戸ヶ崎城主戸ヶ崎次郎義宗ゆかりの寺で、仏具の一種である磬や朝鮮高麗時代の阿弥陀八菩薩の絵像をはじめ、貴重な文化財が多くあります。また、境内に矢田小学校の前身の学校が置かれました。

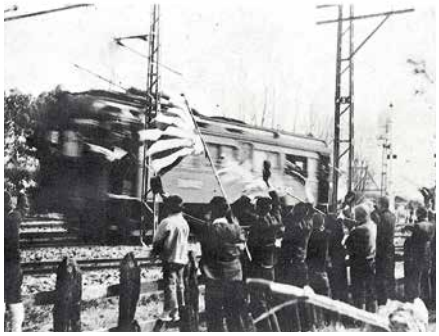
中畑のガラ紡船

ガラ紡とは、水力を利用した水車式紡績機のことで、そのガラガラという音から、ガラ紡と呼ばれた。

3 中畑の船紡績（明治時代）

船紡績は、船の両端に４個の水車を取り付け、水車の回転を利用してガラ紡機を動かし、綿から糸を紡ぐ仕組みです。矢作川の流れと川船を利用した船中工場でした。しかし、電力事情がよくなり、動力がモーターに変わると陸上工場となり、船紡績は、しだいに衰退し、1933年に幕を閉じました。

4 港前駅（大正時代）

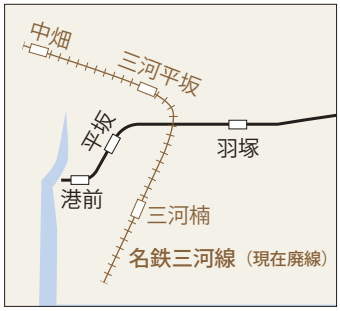


西尾鉄道平坂線
神谷和正『ふるさとの思い出 写真集 明治 大正 昭和 西尾』国書刊行会

1913年、西尾鉄道平坂線の開設が許可され、平坂線は、1914年に西尾・羽塚・平坂・港前の3.9kmが開通しました。港前駅は、当初の駅名は丸山駅でしたが、港前駅と改称されました。この駅から平坂港までの引き込み線が敷かれ、衣浦港や伊勢湾に通じ海陸の連絡をする貨物の集散駅になりました。

しかし、平坂線は、1960年３月には利用者が少ないという理由によって廃止され、バス路線に切り替えられました。

西尾鉄道港前駅跡（平坂町）
現在はバス停として利用されている。



西尾鉄道平坂路線図の一部

西尾－羽塚間の切り通しなどの難工事を経て開通した鉄道路線は、現在では道路となり、港前駅はバス停になりました。

5 田貫町の棒の手（江戸時代）

田貫の棒の手「差し合い」（田貫町）

棒の手は、農民武芸として伝えられたもので、村の祭礼などで行われてきました。愛知県下の各地で伝承され、県の文化財に指定されています。

田貫町に伝わる棒の手は、鎌田流で、江戸時代末期に、地元の石川伊兵衛ら数名が、豊田市宮口の深田兵馬の道場に入門し、『棒目録』を授かったのが始まりと伝えられています。現在も研修会を催すなど、後継者の育成に力を注ぎ、10月第３日曜日の田貫町神明社の祭礼で奉納されています。

寺津のあらまし

「寺津」の地名には、諸説あります。その一つとして、寺を目標として入港してきた船乗りたちが「寺津」と呼んだ説があります。「津」は、港の意味です。地名の由来にもなっているように現在も18か寺と多くの寺院があります。

それらの寺院のうち、願成寺・金剛院・長寿尼寺（廃寺）は、上町にある臨済宗妙心寺派の実相寺の末寺で、室町時代にこの地を支配した吉良氏との深いつながりがあります。鎌倉時代から吉良氏の家臣であった大河内氏は、戦国時代にこの地を治めるために寺津城を築きました。その他に、巨海氏の築いた巨海城や徳永氏の築いた徳永城があり、吉良氏の家臣たちが城主として治めていました。

寺津地区は、碧海台地の南の端に位置し、三河湾に面しています。古くから港として栄えました。江戸時代以降、漁港となり、明治時代末には、えび・うなぎ・海藻・あじ・貝・ぼら・くろだいなどが水揚げされていました。大正時代末からは、漁獲量の減少にともない、のりの養殖が盛んに行われるようになりました。

校区の沿岸部にあたる矢作川下流域や平坂入江の東岸には、江戸時代から明治時代にかけて中根新田、奥田新田、西奥田新田、南奥田新田が造られました。現在は、広々とした稲作や畑作地域となっています。

寺津にゆかりの人物

寺津一揆

天保七年の暴風災害により、寺津・平坂の新田が被害を受けた。そこで、寺津村の農民らは、福寿院に集まり、地主と年貢引き下げの交渉をし、約三割の引き下げを認めさせた。こうした集まりが一揆と見なされ、大浜陣屋の役人が、徒党を組んだ罪として、中心人物の四人を逮捕した。

❖『参河志』をまとめた神官　渡辺政香（1776年～1840年）

渡辺政香画像
個人蔵

「何を宝とするかは、人によりさまざまだが、最も重要なものは書物だ。なぜならば、より高い精神的境地に進むためには、書物に頼らなければならないからだ。」

これは、渡辺政香が開設した文庫（寺津八幡書庫）の所蔵目録に書いたものです。政香の書物に対する志がよくあらわされています。

政香は、14歳の時、下羽角村の浜島文貞の弟子になり、文貞の果たせなかった三河の歴史をまとめる仕事を受け継ぎました。政香は、高齢になっても、よい本があると聞けばどこまでも訪ねて行って書き写し、紀行文や百姓一揆の記録など、多くの書物を書き残しました。中でも『参河志』は、政香とその子によって完成され、三河に関する事柄が百科事典風にまとめられました。全部で43巻、400字詰め原稿用紙で3,800枚余りにのぼります。また、寺津村で起こった百姓一揆（寺津一揆）に対して、寺津の有力者として村人の刑が軽くなるように働きかけました。

❖「知恵伊豆」と呼ばれた老中　松平伊豆守信綱（1596年～1662年）

伝 松平信綱坐像
埼玉県平林寺蔵

江戸城二之丸廊下の橋のそり具合を将軍徳川家光に提案する時でした。松平信綱は、機転を利かせ、手にした扇子を広げ、一間ずつたたみ入れながら家光の気に入ったところで勾配を決めました。

このように知力に優れ、才気あふれることから、信綱は、「知恵伊豆」と呼ばれました。

信綱は、1596年、寺津出身の大河内久綱の長男として生まれました。幼少のころ、叔父の松平正綱の養子となり、松平を名乗りました。そして、1633年、六人衆（後の若年寄）の一人となり、２年後には、老中に昇進しました。1637年、島原・天草一揆が起こると、総大将として派遣され、翌年、一揆の平定に成功しました。こうした功績により、武蔵川越城主（埼玉県）に任じられました。信綱は、三代将軍徳川家光と四代将軍徳川家綱を助け、武家諸法度の改訂や参勤交代の制度化、鎖国の完成など、江戸幕府の基盤づくりに貢献しました。

寺津のおもな史跡と文化財

1 常福寺（平安時代）

刈宿町にあるこの寺の創建は校区で最も古く、平安時代の半ば、源満国が、母の菩提寺として建立したと伝えられています。当時、違勅（天皇の命令に逆らうこと）によってこの地に流された満国が、「この地は永住の地にあらず。わが仮の宿なり」と言ったことから「刈宿」の地名となったといわれています。

本堂前の大仏は、海に向かって建てられ、地元の人から「刈宿のおおぼとけさん」と呼ばれ親しまれています。

常福寺の大仏（刈宿町）
1928年、高さ14mの鉄筋コンクリート製で、寺の繁栄と世界平和を祈願して建てられた。

2 願成寺の黒仏（鎌倉時代）

願成寺は、母の志を受けた足利（吉良）満氏により、1331年に建てられたと伝わります。創建当初は、立派な七堂伽藍を誇りましたが、戦国時代の戦乱によって、建物や仏像のほとんどが焼かれてしまったようです。しかし、「黒仏」と呼ばれるこの寺を開いた可菴和尚の木像「勅諡円光禅師可菴和尚像」や可菴和尚の生涯について書かれている「塔銘牌」、「木造釈迦如来坐像」は、寺の前の海岸に運び出され焼失を免れたといわれています。

黒色の可菴和尚像
（巨海町）
高さ167.6cm

3 寺津八幡社（鎌倉時代）

平安時代末から鎌倉時代にかけて、寺津大河内氏の祖である大河内顕綱が建てたと伝えられています。大河内家の氏神で、歴代の領主から大切にされてきました。1632年、社殿を改築した時に東照大権現（徳川家康）が一緒にまつられ、その後、徳川家光からも朱印状を受けました。境内には、「大河内氏発跡地」と刻まれた石碑と八幡社神官を務めた「渡辺政香翁頌徳碑」があります。

寺津八幡社の社殿（寺津町）

4 金剛院（戦国時代）

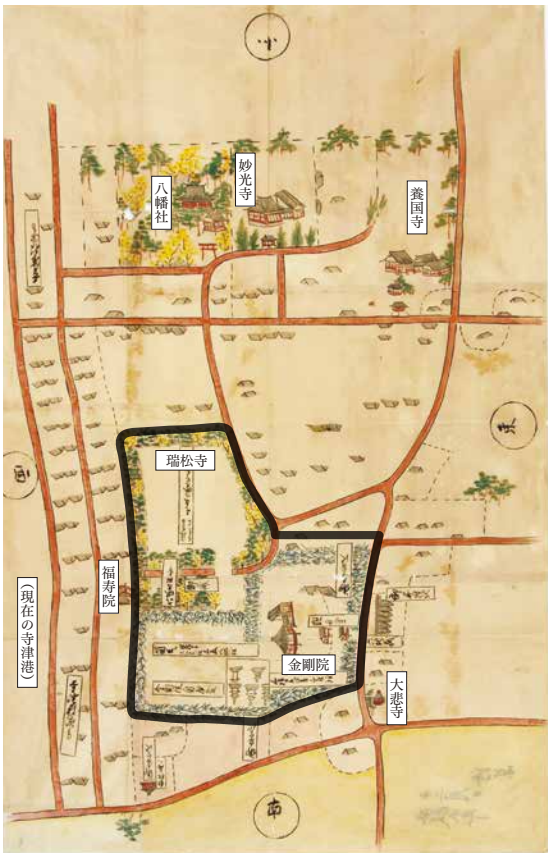
金剛院は、代々寺津城主であった大河内氏のゆかりの寺で、大河内信貞によって1534年に建てられました。江戸時代になると、大河内氏は大名となり、松平姓を名乗って幕府の重要な仕事をする役割を担いました。本堂南側には、大河内代々の墓が13基並んでいます。最も奥には「宝篋印塔」と呼ばれる形式の墓が３基並んでいます。金剛院の宝篋印塔は「関東式」と呼ばれ、関東の伊豆（静岡県）から運ばれてきた石が使用され、はっきりとした彫りがなされているのが特徴です。

金剛院の宝篋印塔（寺津町）
向かって右側から、大河内信貞、その夫人、大河内秀綱の墓である。江戸時代初期に建てられたと推定されている。

5 寺津村絵図（江戸時代）

『寺津村絵図』は、1858年に作成されました。寺社を中心に描かれた絵地図で、現在の瑞松寺の南にあたる木立に囲まれた一帯に寺津城があったと推測されています。

寺津城は、大河内氏の居城で、1504年から1541年のころ築かれました。その規模は、推定で南北に約90m、東西に約72mと伝えられています。入江を背にした城は、海岸沿いの台地にあり、濠と土塁がめぐらされていたといわれています。一説には、蝶が臥した形（羽を広げている様子）に似ていることから「臥蝶城」とも呼ばれ、寺津中学校の校章にデザインされています。



江戸時代に描かれた寺津村絵図
地図中の太枠で囲んだところに寺津城があったとされている。

福地のあらまし

「福地」の地名は、「実り豊かな大地」＝「ふくよかな大地」＝「福地」となることを願ってつけられたといわれています。

古くは福地地区の中央を弓取川と呼ばれる川が流れていました。この辺りでは、川筋が定まらず、いく筋もの川となり、洲状の自然堤防（川の氾濫で土砂がたまった所）上に村ができました。この地域は、川の恩恵を受け豊かな水田地帯でしたが、川が氾濫すると水害を受けやすい地域でもありました。1646年、西尾藩は、治水と新田開発のため、小焼野で弓取川を塞ぎ、広田川につなぎました。それが、現在の吉良町との境を流れる矢作古川の川筋となりました。そのため、今では、弓取川の面影はほとんど残っていません。しかし、福地中学校区は、川ととても関わりが深く、深池、熱池、細池など「○池」という水と関連した地名が多く見られます。この校区で盛んな植木業は、弓取川が運んできた肥沃で水はけのよい土によるものです。現在でも造園業にたずさわっている人がたくさんいます。

福地にゆかりの人物

❖ 綿栽培を伝えた　崑崙人

福地には、いくつかの伝説があります。その中に、「綿の栽培発祥の地」があります。

平安時代の始め、799年７月、福地に言葉の通じない外国の若者が流れ着きました。この若者は、ふんどしに紺色の布を左の肩からかけているという見慣れない身なりをしており、日本人と異なる風貌でした。村人の中に中国（唐）の人がおり、「これは崑崙人（東南アジアの人）だ」と言いました。若者は、この地で生活を始め、やがて言葉を覚えると、「自分は天竺（当時のインドの呼び名）から来た」と村人に伝えました。このことから、この地の地名が「天竺」となり、その後、現在の「天竹町」となったといわれています。

崑崙人のイメージ

その若者の持ち物の中に植物の種のようなものがありました。これが「綿の種」だったと伝えられています。当時、綿は貴重な物であったため、この話は朝廷にも伝えられました。綿はその後、紀伊（和歌山県）、淡路（兵庫県）、阿波（徳島県）、讃岐（香川県）、伊予（愛媛県）、土佐（高知県）、太宰府（福岡県）などの全国各地で植えられたことから、三河が綿の栽培発祥の地ということになったといわれています。

天竹神社（天竹町）
崑崙人を棉の祖（棉祖神）として祀る。神社を囲む石の垣根に製綿業者の名前が見られる。

綿打ちの儀式
海を渡って伝えられた綿にちなんで船みこしが担がれ、綿打ちの儀式が行われている。

福地のおもな史跡と文化財

1 福地の植木と矢作古川

福地地区の航空写真

memo

愛知県のバラの生産量は、1993年から日本一であり、西尾市でもバラの生産が盛んである。福地にある「西尾市バラ園」は、新種の紹介や栽培指導などの情報提供を行い、また、バラ愛好家による200種以上の品種のバラが植えられている。

福地地区には、何軒もの植木業者がいます。

福地の植木業は、江戸時代後期の1820年頃に始まったとされています。1862年には、斉藤町に８軒の植木業者があったと記録に書かれています。当時の植木仲間は、副業として苗木を育て、祭礼の縁日などで販売しました。大正時代からは、果樹や庭木などの植木の生産が中心となりました。この地は弓取川が運んでくる土砂が堆積しており、水はけがよく、植木にとても向いていました。福地の植木は、川の恩恵を受けて発展してきたといえます。

現在、斉藤町には「憩の農園」があり、西尾産の植木や花、野菜などが売られ、毎日にぎわっています。

2 てんてこ祭り(熱池八幡社)

毎年、１月３日、稲などの農作物の豊作を祈る熱池八幡社の御田植祭の神事が行われます。この祭りを「てんてこ祭り」といいます。行列の太鼓の「てんてこ」というリズムからこう呼ばれるようになりました。

てんてこ祭り（熱池町）

厄男たちが、赤い衣服に赤い布で覆面をします。太鼓持ち、酒樽などのかつぎ手、飯びつのかつぎ手をそれぞれ一人ずつ、25歳の厄男が担当し、42歳の厄男３人が腰に大根を付け、太鼓に合わせて腰をふり、行列して神社に向かって歩きます。衣装と身ぶりの奇妙な様子から、「天下の奇祭」として有名です。

３ 修法寺の銅造菩薩立像（飛鳥時代～奈良時代）

修法寺の銅造菩薩立像
（平口町）
高さは26.8㎝である。この仏像は火災にあっており、表面の金はとれている。

修法寺に伝わる金銅仏で、江戸時代半ばには、霊仏として平口村で大事に守られていました。修法寺は、江戸時代には、西尾、吉良、一色の34の寺を歩いて巡る西条吉良三十四観音霊場の一つでもありました。

銅造菩薩立像は、腹部をやや前にせり出した姿から、７世紀後半に作られたと考えられています。

この時代の仏像は、面長の顔に柔らかな細身の姿が特徴で、朝鮮半島の影響を受けた仏像が多いといわれています。この像もその特徴をもっており、面長でほほ笑みを浮かべる優しい顔立ちをしています。

ほとんどが室町時代以降に開拓された福地中学校区にあって、歴史的にきわめて貴重な仏像です。

４ 蓮光寺の薬師如来坐像（戦国時代）

蓮光寺の薬師如来坐像
（鎌谷町）
高さは42㎝で、鎌倉時代初期の作である。

鎌谷町にある蓮光寺は、810年から824年ごろに建てられたといわれています。この寺は、戦国時代に織田信長の焼き討ちにあいました。その時、寺にまつられていた薬師如来坐像を守るために、住職たちは仏像を寺のそばの畑の中に埋め、伊勢（三重県）へ逃げ延びました。時が経ち、本能寺の変によって三河の国に戻る徳川家康が、船の中で北の方角から紫雲がたなびく夢（開運の兆候）を見ました。雲がたなびく方向を調べると、薬師如来坐像の埋まっている畑からでした。そこで、家康は薬師如来坐像を掘り起こさせ、これを祀ったといわれています。

蓮光寺の名前は、この像が埋まっていた畑の辺りに蓮がたくさん生育していたことからついたともいわれています。

東部のあらまし

東部地区は、西尾市の北東部に位置しています。東側には、万灯山をはじめとする山地が広がっており、四季折々の自然の変化が見られます。西側には、矢作古川や広田川、安藤川が流れ、川が運んできた土が堆積し、豊かな田園地帯となっています。

この地域には、古来より人々が住み、多くの史跡や文化財が残されています。縄文前期（6,000年前）の釜田貝塚や弥生時代の岡島遺跡、毘沙門遺跡などが代表的です。また、小島町は銅鐸が出土した場所として知られています。古墳時代には、東側の丘陵地に古墳（主に円墳）が築かれ、いくつもの古墳群を形成しています。奈良時代では、かんがい用施設である木桶が室遺跡で見つかっています。

戦国時代には、松平氏と吉良氏の接点になったことから、江原・小島・浅井・室など、各地に城館がありました。多くの武将が活躍し、かれらとかかわりのある寺が現在も多く残っています。江戸時代になると、複数の旗本や大名によって支配されるようになりました。

現在では、農業だけではなく、東部の丘陵地に大きな工場が進出しています。

東部にゆかりの人物

❖ 江戸幕府を支えた京都所司代　板倉勝重　（1545年～1624年）

板倉勝重は、1545年に小美町（岡崎市）に生まれました。幼いころに出家し、30代半ば過ぎまでを禅僧として過ごしました。ところが、相次いで父や兄弟が亡くなったことから、徳川家康の命により、板倉家を継ぎ、家康に仕えるようになりました。その後、しだいに勝重の役人としての能力が認められ、駿府町奉行、江戸町奉行、そして、京都町奉行という重要な都市を治める仕事につきました。勝重の公正な裁判は、当時の町人の間でも評判になりました。

板倉勝重画像
長圓寺蔵

1601年、京都所司代に任命され、以後19年間、その職を務め、朝廷と幕府の調整、京都の治安と西国大名の監視にあたりました。また、勝重は、裁判などの基本を定め、後に『公事方御定書』の手本とされた『板倉氏新式目』の制定や公家諸法度などによって幕府の京都における支配力を高めることに貢献しました。1624年に京都の邸宅で80年の生涯を閉じ、遺骸は菩提寺の長圓寺（当時、岡崎市中島町にあった）に運ばれました。現在の長圓寺は、後に長男重宗が父の七回忌に万灯山のふもとに移築したもので、この時、肖影堂が造られ、木造の板倉勝重坐像の中に遺骨が納められました。

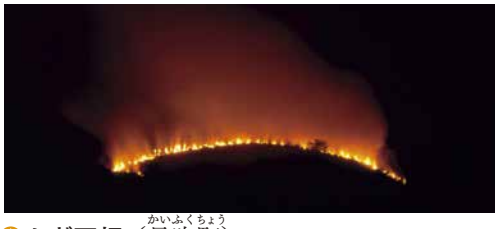
❖ 自然を愛した文人、医者　浜島文貞　（1724年～1804年）

1724年に下羽角村に生まれた浜島文貞は、初め下永良村の加藤宗竜から医術を学び、後に京都へ行き、学問に励みました。文貞は、儒学・国学・医学・薬学・天文学などのほか、漢詩文・和歌・俳句と幅広く学問をおさめました。村に帰ってからは、熱心な教育者として多くの弟子をもち、『参河志』を書いた渡辺政香をはじめとする優れた人材を育てました。また、自分で野山を歩き回って薬草を採取し、病気にかかった人の治療にあたったため、村人から親しみをもって「文貞先生」と呼ばれました。1804年に亡くなり、下羽角町の共同墓地に亀の形をした台石を置いた立派な墓が弟子たちによって建てられました。

浜島文貞画像
個人蔵

東部のおもな史跡と文化財

1 かぎ万灯



かぎ万灯（貝吹町）
西尾市の無形民俗文化財

万灯山は、お盆の14日の晩に行われるかぎ万灯で有名です。

昔、このあたりの山々にはたくさんの寺があり、宗派の異なる寺同士が争いました。この戦いによる死者を、村人が万灯山の頂上に埋め、塚を建てました。さらに、薪を積み重ねて百八つの「すずみ」を作り、万灯山の中腹にかぎの形に並べ、一斉に火をたいて死者の魂を鎮めました。これが、かぎ万灯の始まりと言い伝えられています。

2 平原の滝

平原の滝（平原町）
大小二つの滝からなっており、小滝には、閏年には13本、それ以外は12本の竹の筧がかけられている。

平原の滝は、西尾市東部の山間地にあり、周囲は自然林に囲まれています。小滝の上には、平安時代に比叡山の慈覚大師が夢のお告げによって建てたといわれる薬師堂があります。この滝は、薬師の滝とも呼ばれ、水を飲めば長寿に、打たれれば難病が治るとして信仰されてきました。

3 室城跡（戦国時代）

現在の室城跡（室町）
城跡には、直径2.5mの井戸の跡が残っている。

室場小学校の北側に、水田に囲まれた標高20mほどの小高い山があります。戦国時代には、この山の上に室城（牟呂城）が築かれました。室城主の富永伴五郎忠元は東条城主吉良義昭の重臣として、松平元康（徳川家康）の軍勢と戦いました。1561年、吉良氏の本拠地である東条城が元康方に包囲されたため、伴五郎は30騎あまりの兵を率いて出陣し、藤波畷で壮絶な死をとげました（藤波畷の戦い）。このとき伴五郎は25歳といわれています。

西方寺

4 西方寺（戦国時代）

西方寺には江戸幕府の代官頭、伊奈忠次の位牌があります。伊奈氏は西方寺北にあった小島城主でしたが、三河一向一揆で一揆方に付いて敗れたことから城を去りました。

忠次も父とともにこの地を離れましたが、家康の伊賀越えに生死を共にしたことから許され、関東の天領を支配する代官頭になります。伊奈氏は代々関東郡代と称して、江戸湾に流れていた利根川の太平洋への付け替え、宝永噴火による富士山東麓の復興などの業績をあげました。また、埼玉県伊奈町は忠次が陣屋（屋敷）を構えたことからその名が付けられました。

加藤嘉明生誕地の碑（上永良町）

5 加藤嘉明生誕の地（戦国時代）

上永良町の神明社に加藤嘉明生誕地の石碑が立っています。嘉明は松平好景に仕える武士の息子として生まれ、豊臣秀吉に仕えました。1583年の賤ヶ岳の合戦で活躍し、福島正則、加藤清正らとともに「七本槍」の一人として数えられる名将となりました。関ヶ原の戦いでは徳川家康の東軍に味方し、伊予松山（愛媛県）20万石を与えられ、後に40万石の会津城主（福島県）にまでなりました。1625年には神明社の本殿再建に尽力しており、1631年に69歳で病死しました。

師弟延命地蔵（江原町）

6 妙喜寺の師弟延命地蔵（昭和時代）

妙喜寺は、今川義元に従い桶狭間で討ち死にした江原丹波守政秀ゆかりの寺です。

1945年１月13日の午前３時半ごろ、三河湾を震源とする三河地震が起き、東部地区でも214人が亡くなりました。この地震で本堂が倒れ、名古屋から疎開していた12名の小学生と１名の教員が犠牲となりました。この犠牲者の冥福を祈って作られた師弟延命地蔵が祀られています。

一色のあらまし

「一色」という地名は、一種類という意味で、年貢・公事・労役の三つのうち、年貢の一種類だけを負担すれば、他の税は免除される土地を表しているといわれています。

一色地区は、三河湾に面しており、矢作川が形成した三角州、沖積低地にあります。古代は、海の中にあるわずかな陸地に人が暮らしていました。今のような一色町の土地のほとんどは江戸時代から行われた新田開発によって形作られました。そのため、現在、丑新田、実禄新田など、「〇〇新田」という地名や、その土地の開拓者の名前をとった地名（中野・外山・沢田の３人の名前からつけられた中外沢、鈴木惣五郎からつけられた惣五郎など）が多く残されています。また、海岸沿いでは、標高１m未満の所が大部分です。

一色町には、特色ある産業が根付いています。日本有数の生産量をもつカーネーションの栽培は、味浜や生田を中心に見られます。漁港付近には、えびせんべいなどの水産加工品の工場が多く見られます。また、日本全体の４分の１を出荷するうなぎの養殖場は、生田を中心に点在しています。

一色にゆかりの人物

❖ 日本に幼稚園を紹介した関信三（1843年～1880年）

関信三肖像
『関信三と近代日本の黎明』
新読書社

1843年に一色の安休寺に生まれた関信三は、仏教・漢学についての学問をおさめ、その才能が認められるようになりました。1870年には横浜（神奈川県）で英語を学び、1872年からは欧州諸国を巡るなか、単身、イギリスに残ってキリスト教の教育について学びました。そこでドイツ人の教育学者であるフレーベルの思想にふれ、日本では女子や幼児の教育が必要だと知りました。帰国後、東京で英語の教師として活躍するなか、当時の文部大臣に訴え、1876年東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に附属幼稚園が開設されると初代園長になりました。しかし、病気によって37歳という若さで亡くなりました。その功績をたたえ、宗善寺（東京都台東区）にある信三の墓は、フレーベルの墓と同じ形で造られています。

❖ 一色へ鉄道をつないだ神谷傳兵衛（1856年～1922年）

神谷傳兵衛肖像
オエノンホールディングス提供

神谷傳兵衛は、1856年に松木島で生まれました。８歳の時に酒樽造りの弟子として働き始めました。その後、横浜のブドウ酒工場で働き、独立すると、日本人の好みに作りかえたブドウ酒を販売して大きな財産を築きました。本格的なワイン製造施設「シャトーカミヤ」（茨城県牛久市）を建て、その西洋風の建物は、現在、国の重要文化財に指定されています。そして、傳兵衛が開いた「神谷バー」は、現在も浅草（東京都台東区）で営業しています。

また、1916年には、経営危機になっていた三河鉄道の社長になり、莫大な財産を投げ打って路線を延ばすなど、事業を拡大して会社を再建しました。傳兵衛の死後、1928年、鉄道は碧南から三河吉田まで結ばれ、松木島の駅は、神谷傳兵衛の功績をたたえ「神谷駅」と名付けられました。さらに、1936年に三河鳥羽から蒲郡までの路線が開通し、現在の豊田市から西尾市を経て、蒲郡市をつなぐ鉄道が完成しました。

一色のおもな史跡と文化財

1 満国寺（平安時代）

満国寺は10世紀の半ば、源満国によって建立されました。満国は違勅（天皇の命令に逆らうこと）によって三河に流され、父親の菩提を弔うため満国寺を、母親には常福寺（刈宿町）を建てたと伝えられます。

17 世紀の火災により、御堂や宝物を焼失し、その後、現在地に再建されました。この寺には『二条殿執達状』（江戸時代）が保存されており、明治維新まで二条関白家の御祈願所となっていました。

満国寺（一色町味浜）
本堂は、1671年に建てられた。老朽化が進んだため、1995年に改築された。

2 安休寺（室町時代）

吉良満義の二男一色有義（吉良氏庶流）が、父親の菩提を弔うために創建したと伝えられる寺です。墓所には二人の石塔があります。

寺の北隣に「一色氏発祥之地」の碑があります。一色氏は鎌倉時代、足利泰氏の子公深が一色に屋敷を構え、一色氏を名乗ったことが始まりとされます。

吉良満義、一色有義父子の石塔

3 赤羽別院　親宣寺（江戸時代）

由緒によれば、この地は蓮如上人開基の道場跡で、1701 年、岡崎出身の御家人本目親宣が、霊場の再興と先祖の供養のため建立しました。

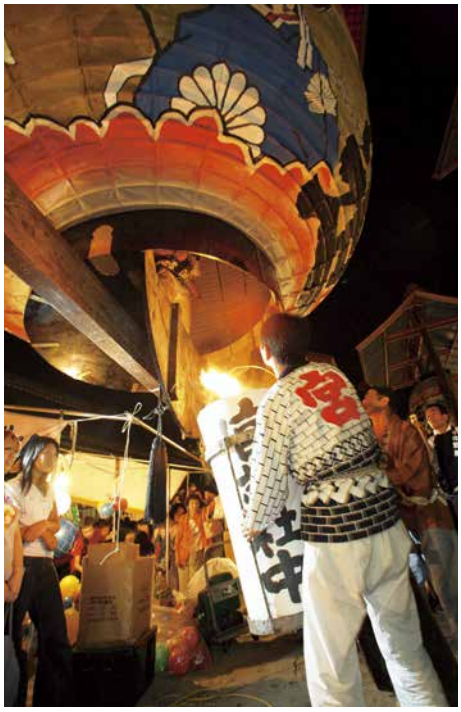
1798 年、東本願寺の別院となり、1938 年現在の山門が完成しました。しかし、1945 年の三河地震によって本堂と山門以外の建物が倒壊し、1959 年の伊勢湾台風で本堂も倒壊し、一時は山門が残るのみとなりました。現在の本堂は 1995 年に再建されたものです。

赤羽別院の山門（一色町赤羽）
山門は、三河地方有数の立派さで、地震、台風にも耐え、当時のままの姿を残している。

4 大提灯（おおぢょうちん）まつり（江戸時代）

戦国時代、夏から秋にかけて、一色の海辺には毎夜、海魔（かいま）（海の魔物）が現れて田畑を荒らし、人や家畜の命を奪っていました。困り果てた村人たちが、諏訪神社（すわじんじゃ）で大かがり火を焚（た）いてお祈りをしたところ、海魔は退散しました。やがて、かがり火が提灯にかわったと伝えられています。

その後、提灯の大きさや絵を競い合うようになったため、西尾藩から再三にわたって提灯を大きくしてはならないという注意がなされ、今の提灯の大きさになったといわれています。



大提灯に火を灯す瞬間（一色町一色）
ろうそくの長さは約1mある。

「一色学びの館」へ行こう！

一色町の南部、レンガ造りの円柱形の建物が一色学びの館です。学びの館は図書館と資料館が併設されており、資料館の中心には大提灯のレプリカが吹き抜けになったフロアに大きく展示されています。

１階は「三河一色大提灯まつり」「鳥羽の火祭り」のコーナーがあります。２階は海にかかわるコーナーです。市内貝塚（かいづか）の出土物や身近にあった漁具、海を通した交流・交易の歴史パネルが展示されています。

◉場　　所　　西尾市一色町一色東前新田8番地
◉電　　話　　☎0563－72－3880
◉開館時間　　午前９時～午後７時
◉入 館 料　　無料
◉休 館 日　　月曜日（祝日は開館）
　　年末年始・特別整理期間（展示室開館）

HP：https://isshiki-ccp.jp/manabi/

佐久島のあらまし

「佐久島」の名前の由来は、伊勢神宮に仕えた人々の中に「作彦の民」と呼ばれる人々がいて、この島に来て農業を始めたことから、「作島」が「佐久島」になったと伝えられています。平城京では、「析嶋」と書かれた木簡が出土しており、古代からの名前であることがうかがわれます。

佐久島は、三河湾内で一番大きな島で、約1,800万年前に海中で土砂が堆積した岩からできた島です。古代から海運が盛んで、島の中に点在する古墳は、６世紀から７世紀の間に造られ、漁業に関わる有力者の墓だと考えられています。江戸時代には、大多喜藩（千葉県）の領地になり、海運でも栄えました。

現在では、釣りや潮干狩り、海水浴やハイキングなど、ゆっくりした時間が楽しめる島として多くの人が島を訪れます。さらに、宿泊・滞在型レジャーにも力を入れ、佐久島クラインガルテンが造られました。雑誌・テレビなどのマスコミに取り上げられ、特集される機会も近年増えてきました。

佐久島へは、一色さかな広場にある渡船場から定期便（第３さちかぜ）で約25分かかり、１日に７便が出ています。

佐久島にゆかりの人物

重吉出生之地に建つ石碑
（一色町佐久島東屋敷）

❖ 484日に渡る漂流の旅　小栗重吉（1785年～1853年）

小栗重吉は、1785年に佐久島の農家の二男として生まれました。15歳の時に尾張の半田村（半田市）へ養子に行き、船乗りとなりました。その働きぶりが高く評価され、28歳の時に船頭頭となりました。そして、1813年、重吉は、13人の督乗丸の乗組員とともに江戸からの帰路、伊豆半島の子浦（静岡県）から渥美半島の伊良湖を目指すうち暴風雨にあってしまいます。そのまま漂流すること17か月、1815年２月に中米近くの沖にてイギリス船に救助されます。このとき生き残っていたのは、重吉と２人の乗組員だけでした。途中、ロシア船に引き渡され、根室（北海道）からは陸路をたどり、ついに1817年５月、５年ぶりに妻子の待つ半田村へ帰ってきました。

重吉の漂流体験は新城（新城市）の江戸家老池田寛親によって『船長日記』にまとめられました。また、重吉は日ロ辞典『ヲロシヤノ言』を作りました。これらの書物は、異国船打払令の強化や外交に関わる問題が続発する時代において貴重な資料となりました。

このような重吉に尾張藩は小栗の姓を与え、藩の役人として取り立てましたが、重吉は、すぐにこれを断りました。そして、亡くなった乗組員たちの霊をなぐさめるための活動に残りの人生のすべてをささげ、69歳でこの世を去りました。

漂流、救助後の経路
佐久島公式ホームページより

日本近海における督乗丸の漂流図
『会報　教育と文化　53号』愛知教育文化振興会による

佐久島のおもな史跡と文化財

1 平城京跡出土木簡（奈良時代）

奈良時代、都として栄えた平城京には全国から産物が集まりました。その荷札である木簡が、平城京跡から多く出土しています。その中に天皇に献上された食物である「贄」を表す佐久島の木簡があります。佐久島から送られた「贄」は、「佐米楚割」（さめの身を細かく裂いて干したもの）、「赤魚」（正月の食事で食べられたかさごだと推測される）、「宇波加」（めばるだと推測される）の三種がわかっています。

平城京跡より出土した木簡
参(三)河国幡豆郡析嶋(佐久島)の表記が見られる。
奈良文化財研究所蔵

2 佐久島八劍神社の八日講まつり（江戸時代）

八日講まつりは、毎年、１月８日に行われることから、この名前がついたといわれています。この祭りは、1765年に当時の神主が京都へ行き、弓を射て邪悪なものをさける方法を授けられ、それを祭りに取り入れたことがはじまりとされます。

八日講まつりの八角凧（一色町佐久島）
おはらいのあと、鬼と書かれた凧に向かって矢が射られる。

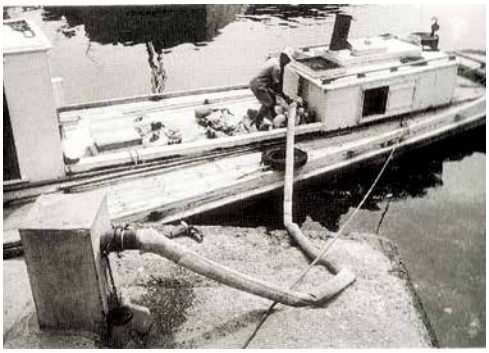
祭りは、神社の拝殿から１辺３尺４寸（約１m）の大きな八角凧（四角形を組み合わせて作られたもので、実際は十六角形の凧）に向かって弓矢を射る場面でクライマックスを迎えます。射貫かれた八角凧は、その１年の厄除けとなるため、参列者たちは、これに集まり、骨組みをちぎって家に持ち帰るというのがならわしです。

その後、講員と呼ばれる祭りの役員たちと神社の人たちとで、直会といわれる会食が行われます。この場では、講員たちに三角形のお盆で食事が運ばれます。この三角形のお盆は、「三角膳」「みすま膳」と呼ばれ、古代、三角形の畑や水田が神様の場所であったため、五穀豊穣を祈願する祭りに用いられるものです。

離島の生活と島おこし

自然豊かな佐久島では、昔から漁業が盛んでした。江戸時代には、現在の佐久島港が整備され、船の防水のために使っていたコールタールを潮害から家屋を守るために壁に塗るなど、海と人々の生活とが深く結びついています。しかし、きれいな飲料水の確保は難しく、雨水を溜めたり共同井戸を利用したりしていましたが、日照りや伝染病の流行などに悩まされていました。

1960年ごろには、一色町は、水を一色の港から送水船で運び、島の人々へ水を配っていましたが、量の不足や海が荒れた日は水が運べないなどの問題がありました。そこで、1973年、知多半島から海底に水道管をひき、水が送られるようになりました。



送水船
一色港で水を積んでいる。1963年撮影。

現在、水だけでなく電気も知多半島から地下送電線を通して送られています。島の生活に欠かせない大きな荷物は、台船と呼ばれる船に乗せられて運ばれてきます。この台船は、島の人たちの自家用車や工事のための重機、島で出された資源ごみ・可燃ごみも運びます。

おひるねハウス
アート作品をたどって島を巡るアート・ピクニックができる。

島内に医師のいない時間が多いことや島内で生活しつつ漁業以外の仕事に就くことは大変難しいことなど、離島の生活は不便な点が多く、過疎化が進んでいます。そのため、人口は220人（2020年９月現在）で、ピーク時（1947年）の1,634人の約８分の１まで減少しました。

そこで、島おこしとして、2001年から、島の自然や伝統とアートとの出会いによって島の活性化を目指す取り組みが始まりました。また、「三河湾の黒真珠」と呼ばれる黒壁の街並みを守るための活動も行われています。

アート関連のイベントや近海産の海の幸、のんびりとした雰囲気が、多くの観光客をひきつける島として、佐久島は注目されています。

吉良のあらまし

「吉良」の地名は、平安時代に成立した雲母山（八ツ面山）から名づけられた吉良荘と呼ばれる荘園に由来します。その南に位置するのが吉良町で、吉良町の「吉良」は、この地を治めていた吉良家からとったものといわれています。

吉良地区の西側には、矢作古川が流れ、東側には、美濃三河高原が、南側には、三河湾が広がっています。古くから人々が生活を営み、様々な時代の史跡が多く残されています。

稲作、畑作、果樹栽培が盛んで、多くの農作物が、低地で栽培されています。また、山ろくでは、気候を生かして茶の栽培も行われています。さらに、海岸部には温泉、潮干狩り、海水浴、マリンスポーツなどのレジャースポットも多く見られます。

近年は、自動車関連の企業が進出しており、農業・工業・観光業など、多様な産業が発展しています。

吉良にゆかりの人物

❖ 家康の天下取りに尽くした松井忠次（松平康親）（1521年～ 1583年）

松井忠次画像
（法応寺旧蔵）

松井忠次は1521年、吉良町小山田に生まれました。松井氏は古くから小山田を治めた地元の豪族で、小山田の正龍寺に松井家墓所が、集落後方の丘に松井城（波城）の城跡が残っています。

忠次は、はじめ東条吉良氏につかえていましたが、松平元康（徳川家康）の進出にともない元康につかえるようになります。その後、松平家忠の後見役となり、元康が東条城主吉良義昭を攻めると、津平砦を築き大きな功績をあげました。家忠が東条城主となると忠次は東条城代となります。

忠次は家康に従い、姉川の戦い、三方ヶ原の戦い、長篠の戦いなどに参戦します。武田氏の諏訪原城を落城させた後はこの城の守備を命じられ、武功により「松平」の姓を賜ります。1581年、家忠が死ぬと東条松平家は家康四男の忠吉が継ぎ、忠次はその後見となります。その後も家康の天下取りに貢献しますが、1583年、沼津で亡くなり、遺言で東条城北の法応寺（廃寺）に葬られました。子孫は老中を輩出する譜代大名として重要な役割を果たし、最後は武蔵国川越（埼玉県）８万石で幕末を迎えます。

❖『人生劇場』を著した小説家　尾崎士郎（1898年～1964年）

尾崎士郎

尾崎士郎は、横須賀町（吉良町上横須賀）の商家に生まれました。東京の大学に進学し、社会主義の活動に積極的に関わるようになった後、1921年に偶然見かけた懸賞小説に応募し、『獄中より』で入選し、小説家として身を立てていくことになりました。1933年から都新聞に掲載した『人生劇場』が、川端康成の絶賛によりベストセラーとなり、その後、雑誌での連載などで20年以上も執筆が続く代表作となりました。この作品は、たびたび映画化され、『人生劇場 望郷篇』（1954年公開）では、吉良町でロケが行われ、町民の多くがエキストラとして参加しました。

尾崎士郎記念館（吉良町荻原）の総資料数は、4,000点を超え、直筆原稿・書簡・著書・愛用品などを順次展示しています。

吉良のおもな史跡と文化財

1 正法寺古墳（古墳時代）

古墳の全長が最大約94mで、西三河最大級の前方後円墳です。2001年、2002年の発掘調査で、斜面に拳ほどの大きさの石がすきまなく敷きつめられており、３段の段階状に築かれていることがわかりました。

出土品として、大量の円筒形のはにわや貴人のための柄の長いかさをかたどったはにわなどがあります。正法寺古墳に誰が埋葬されているのかはわかりませんが、三河湾・伊勢湾に通じる交通路を押さえる豪族と推定されます。

空から見た古墳（吉良町乙川）

赤い線が古墳のおよその位置を示す。手前に前方後円墳の形をした植え込みがある。

出土品の円筒形のはにわ
西尾市教育委員会蔵

2 幡頭神社（平安時代）

幡頭神社は、三河湾をのぞむ岬の先端に築かれ、宮崎という地名の由来にもなった由緒ある神社です。平安時代初期に編集された『延喜式』にその名が認められる「式内社」です。本殿は1580年の建築で、桃山時代の建築様式を伝えており、重要文化財に指定されています。本殿両脇の神明社、熊野社は江戸時代前期の建造で、県指定文化財に指定されています。

幡頭神社（吉良町宮崎）
本殿は桃山時代の優れた建築で、国指定重要文化財です。神明社（右）、熊野社（左）ともに県指定文化財です。

また、知多半島の先端を羽豆岬といい、羽豆神社が祭られています。時代によっては「幡頭」の文字を用いた文献もあり、宮崎の幡頭神社と共通します。両「はず」神社とも主祭神は建稲種命を祭っており、二つの神社には三河湾を通じたつながりが想像されます。

❸ 金蓮寺弥陀堂（鎌倉時代）

源頼朝が、三河国の守護であった安達盛長に命じて建てさせた三河七御堂の一つといわれています。しかし、建築の特徴からは鎌倉時代半ばに造られたものだと考えられています。非常にシンプルな構造ですが、檜の皮でふいた緩やかな曲線を描く屋根が特徴です。内部には、阿弥陀三尊像が安置されています。

県内最古の木造建造物で、1955年に国宝に指定されました。

金蓮寺弥陀堂（吉良町饗庭）
深い軒と緩やかな屋根の曲線は美しく、立つ位置によって様々な表情を見ることができる。

❹ 旧糟谷邸（江戸時代）

糟谷家当主は、室町時代の終わりより代々縫右衛門を名乗りました。江戸時代には、この地域の大地主であり、三河木綿の問屋、金融業、肥料や日用雑貨の商い、近郷の人々への融資、廻船への投資など、幅広く商売を行い、財をなしました。また、大多喜藩（千葉県）の御用商人を勤め、苗字帯刀を許されるほどの力をもつようになりました。

明治時代末には、西尾鉄道株式会社に出資し、大正時代に西尾－吉良吉田間に鉄道が開通した際には、糟谷邸の近くに三河荻原の駅が造られました。

長屋門から見た母屋の様子（吉良町荻原）

西尾市塩田体験館　吉良饗庭塩の里へ行こう！

吉良饗庭塩の里では昔ながらの太陽熱と風の力を利用した塩づくりを体験することができる全国でも珍しい施設です。この体験を通して塩田の歴史と塩の製法を楽しく学ぶことができます。

また、展示室では製塩業の展示のほか、正法寺古墳や岩場古墳出土の円筒棺、吉良上野介義央に関する資料を展示しています。

◉場　　所　　西尾市吉良町白浜新田宮前59－1
◉電　　話　　☎0563－32－3373
◉開館時間　　午前9時～午後5時
◉入 館 料　　無料
◉休 館 日　　月曜日（祝日は開館）、年末年始
HP：http://www.aibajio.jp/

幡豆のあらまし

「幡豆」の地名は、幡頭神社に由来するという説や域内の礒泊郷から「ハト」、「ハズ」に転訛したという説、停泊地を意味する「波止（泊）」から生まれたという説などがあります。幡豆という呼び方は、やがて古代律令制の三河国幡豆郡（参河国播豆郡）につながったといわれています。

幡豆地区の北側には、三ヶ根山をはじめとした美濃三河高原が、南側には、三河湾が広がっています。また、弥生時代前期の集落である江尻遺跡をはじめとした遺跡が点在しています。校区内にある代表的な古墳は、三河地方では最古の横穴式石室のある中之郷古墳や６世紀後期に造られたとされるとうてい山古墳です。校区南側の寺部には、中世の幡豆の領主小笠原氏が居城とした寺部城の跡が残っており、土塁や堀などの遺構が現在も見られます。

鳥羽の神明社では、毎年、２月の第２日曜日に、約1,200年続くといわれる「鳥羽の火祭り」が行われます。

戦後、三ヶ根山や幡豆海岸が、三河湾国定公園に指定され、観光地として発展しました。現在は、東幡豆海岸で手作り筏による「はずストーンカップチャレンジレース」が開催されています。

幡豆にゆかりの人物

❖ 東幡豆のために尽力した人　渡辺義知（1874年～1942年）

渡辺義知は、1874年に東幡豆山口に生まれました。義知は、郷土のために力を尽くした人でした。義知が、行った事業の代表的なものとして、明治時代の大津波による小見行海岸荒廃地の復旧工事や東幡豆９地区に各１本ずつ通された道路の新設、改修工事などがあります。また、義知は、東幡豆区有林に松や檜等の植林を行いました。1955年には、この木を財源として東幡豆小学校の体育館が建設されました。

そこで、義知の功績をたたえて、その坐像が東幡豆小学校体育館内に置かれました。また、東幡豆の風越峠には、1942年に建てられた顕彰碑があります。

渡辺義知の坐像（東幡豆町）
現在、この坐像は、東幡豆小学校の校門付近に移設されている。

❖ 鶴城丘高等学校の前身を築いた人　鈴木均平（1875年～1949年）

鈴木均平は、1875年に下地村（豊橋市）に生まれました。６歳のころに西幡豆の鈴木兵次郎の養子となりました。均平は、愛知一中（現在の愛知県立旭丘高等学校）を経て、慶應義塾（現在の慶應義塾大学）で学びました。西幡豆に戻ってからは、数々の役職を歴任し、明治時代から戦前の昭和時代を通し、地方政治家として西尾・幡豆地区の政治、教育、文化に深く関わりました。

大正時代の初期、県会議員在任中の均平は、西尾・幡豆に中学教育を充実させたいという強い思いから、西尾町長の新家寛や平坂町長の稲垣小七郎、政治家として地方や国の政治に尽力した鈴木友次郎らと共に中学校の設立に尽力しました。建設をめぐっては、県議会内における政党の対立や中学校の設立を刈谷と西尾のどちらにするのかといった地域の対立で、なかなか進みませんでした。後に、中学校設立は、刈谷に決まり、西尾には、1919年４月に愛知県立蚕糸学校（現在の愛知県立鶴城丘高等学校）が開校しました。

創立功労者
左より新家寛氏、鈴木均平氏、鈴木友次郎氏、稲垣小七郎氏（円内）
『創立90周年記念誌』愛知県立西尾実業高等学校

幡豆のおもな史跡と文化財

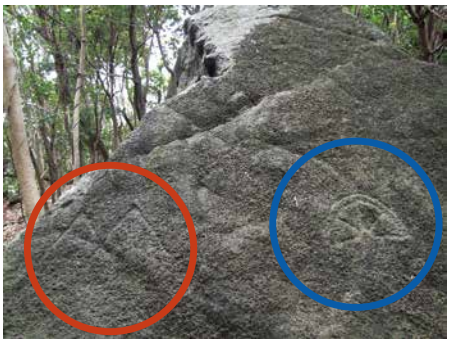
1 かぼちゃ寺ハズ観音

妙善寺の外観（東幡豆町）

かぼちゃ寺ハズ観音は、正式には「性海山　妙善寺」という浄土宗西山深草派の寺院です。その創建は古く、行基の開基といわれ、最初は奈良時代に建てられた天台宗の寺院でした。その後、安土桃山時代になって、利春僧都が再興して、西林寺と号するようになりました。1586年には、小笠原正吉の母といわれる妙善尼の菩提を弔うために大修理が行われました。そして、江戸時代中期になって、今の妙善寺と改名されました。この妙善寺が、「かぼちゃ寺」と呼ばれるのは、冬至の日に「かぼちゃしるこ」の接待を行っているからです。

2 幡豆石（八貫山）

幡豆石（花崗岩）は、かたく、加工には不向きですが、比重が重く、ごつごつして、くずれにくいため、河川や海岸の護岸・築堤などに使用されてきました。



八貫山の矢穴石（鳥羽町）
○「違い山形」の刻印
○「生駒車」の刻印

前島・沖島をはじめ海岸部や山間部には、「矢穴石」と呼ばれる石を割るための長方形の穴が破線状に掘られた石が点在しています。これは名古屋城の石垣用に採石された石の残石です。肥後藩主（熊本県）の加藤清正（豊臣秀吉の側近であった）は、築城の名手として知られ、名古屋城の築城にたずさわりました。鳥羽の八貫山頂上付近にある「違い山形」や「生駒車」などの刻印が施された矢穴石は、この周辺が清正の採石地であることを表しています。

明治時代以後、幡豆石の採石は、地場産業として栄えましたが、現在の採石場は3か所になりました。

❸ 愛知こどもの国

愛知こどもの国（東幡豆町）

愛知こどもの国は、愛知県政100年を記念して、1974年に開園しました。園内は、こども汽車やわくわく工房などがある「ゆうひが丘」とキャンプ場や遊具、芝生広場などがある「あさひが丘」に分かれています。

愛知県公園協会の事業報告によると、年間を通して30万人近い人が施設を利用していますが、最も利用者の多かった1986年の約80万人をピークに、利用者は年々減少しています。この状況を改善するために、運営を愛知県公園協会から地元のＮＰＯ（非営利組織）へと移行しました。

現在は、地域の子どもたちの遊び場としてだけではなく、西尾市主催の駅伝大会の会場などとして使われ、広く利用の拡大を図っています。

鳥羽の火祭り

鳥羽の火祭りは、約1,200年前から行われていると伝えられる天下の奇祭です。

鳥羽神明社の境内に高さ５m、重さ２tの巨大な松明「すずみ」が２基設置され、夜空を焦がす巨大な火柱となります。

「すずみ」には、「神木」と「十二縄」が納められ、どちらから早く取り出されるかで、その年の天候や豊作不作を占います。

厄男から選ばれた「神男」と「ネコ」と呼ばれる奉仕者たちが水をかぶり、燃えさかる「すずみ」から「神木」と「十二縄」を取り出して御神前に供えます。その迫力は思わず息をのむほどです。

燃え残った竹を箸にすると歯の病気にかからないといわれています。

鳥羽の火祭り（鳥羽町）

国の重要無形民俗文化財に指定されている。祭りは、毎年、２月の第２日曜日に行われる。